
龍姫

神栖忠明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍姫

【Zコード】

Z4992A

【作者名】

神栖忠明

【あらすじ】

俺 翼鶴児は平凡な高校一年生だ。本当に超がつくほど平凡だ。容姿普通、成績普通、全てが普通。そんな俺はこれからも普通で面白みの無い人生を送つしていくものだと思っていた。しかし、彼女に出会ってから全てが変わったのだった

第一話・危機を救つたものは…（前書き）

みなさんの小説を読んで私も書いてみたいと思い投稿しました。しかし学生なので語彙も少なく、どこか文がおかしいかもしれません。おまけに更新も遅いと思います。それでも良いという方は読んでみてください。

第一話・危機を救つたものは…

ハアハアハア

「なんなんだあいつは！」

夕暮れの市街地の中、学生服を着た少年が走っている。姿を一言でいえば平凡、特別美形でもなければ特別醜悪な顔をしているわけではない。そんな少年、異鷹児は走っていた。まるで何かに追われているかのように。

「とりあえずはまいたかな？」

少し開けた広場に立ち止まり鷹児は振り返った。

「助かった…」

緊張が解け、その場にへたりこんでしまった。いくら若いとはいえ全力疾走を続ければ誰でも疲れてしまうだろう。息を整えるためにしばらく動けなかつた。ズン…ズン…ズン…

「うつ…もう来たのか！？」

ズン…ズン…ズン…

足音にあわせてアスファルトの地面が微かに揺れている。かなりの重量があることがわかる。鷹児が逃げてきた道にそいつは現れた。身長は3メートルをゆうにこし、肉体は筋骨隆々という言葉通りの体。なにより特徴的なのは額から生える一本の角と、口からのぞく牙。それはまるで…

「！」の鬼さつきよりでかくなつてやがる…」

まさに鬼だった。

「くそつ…」

鷹児は再び逃げようと足に力を込めた。

ズカアーン…！

鬼が地面に足を叩き付けた。

「うわっ！」

地面に衝撃が走り大きく震え、凌児は転んでしまった。

「早く逃げないと！」

立ち上がろうとした凌児の体に影がさす。おぞるおぞる顔をあげた。

鬼が拳を振り上げていた。

（死ぬ：のか）

あまりの恐怖に体が震つことをきかない。しかし、無情にも鬼の拳が振り下ろされる。

「うわああ！」

「でいっ！」

何かが鬼を吹き飛ばし、凌児の目の前にたつていた。

「へっ？」

凌児はあまりの出来事にまぬけな声をだしてしまった。

そこにたつっていたのは美少女だったのだ

第一話・危機を救つたものは…（後書き）

どうでしたでしょうか？悪かった点などを「」指摘して頂ければ次の
投稿までには直そうと思います。是非感想をお願いします m(—)

m

第一話・非日常への入り口

ジリリリリ

カチッ

「起きるか…」

多少眠そうにしながらも少年 異鶴児は目を覚ました。鶴児は市立水治高校の一年生。今朝もそのために起きた。

「朝飯でも作るうかなあ…」

彼が朝食を作るのは水治高校の寮で暮らしているからだ。鶴児は和食派である。毎朝白米と納豆と味噌汁を食べるのが習慣になっている。

朝食を食べ終え、顔を洗い歯を磨く。そして制服に着替え家をでた。

学校へは寮から徒歩五分と比較的近い距離にある。そのせいか教室につくのはいつも時間ぎりぎりになる。この日もそうだった。

ガラガラ

2-Aの教室の戸を少々乱暴に開け中に駆け込んだ。

「巽…。またきつぎりか」

入ると同時に口説で頭を叩かれた。

「遅刻じゃないんだからいいでしょっ! 犬飼先生」

犬飼武雄。^{いぬかいたけお}鶴児の担任で国語科の教師。いつもよれよれのシャツとジヤージというだらしない格好をしている。

「むう…。まあいいか。席につけ」

「はーい」

澪児が席につくと犬飼は出席をとりはじめた。

四時間目の授業が終わり昼休みになった。

「巽～。学食行こうぜ」

そう声をかけてきたのは小学校から今までずっと一緒にの大親友である長門亮平だ。ちなみに顔だけは良いので澪児よりモテる。

「そうだな～」

「まつてまつて！私も行く！」

慌てた様子で一人の女子生徒が言った。

「お前が弁当持つてこないなんて珍しいなあ。加奈子

穂村加奈子も小学校からずっと一緒にいた。ちなみに加奈子は容姿もなかなかで成績もいい。

加奈子は眠そうに欠伸をして、

「昨日忙しくてあまり寝てないの。だから今朝は早起き出来なくてお弁当作れなかつたのよ」

「昨日何かあつたのか？」

澪児は少し心配そうに言った。

「別になんでもないわよ~ただの親の手伝い

「ふ~ん」

それから三人はとりとめのない話をしつつ食堂に向かった。

昼食を食べ終え休憩しているとき亮平が、
「そういうや巽は彼女つくらないのか?」

いきなりそんな事を言つてきた。

「わ、私も聞きたいわ!」

加奈子も妙に力がこもった声で言つた。

「はあ……。つくるきもないし出来ないと思つ。俺は全てが普通だからな……」

自分で言いながら悲しくなつてきたのか言葉は段々小さくなつていつた。

「そんなことないわよ~そりや見た目は普通だし成績も平凡だけど
!人は中身よ!中身!」

澪児はそれを聞いて更に落ち込んだ。

「加奈子。それはフォローになつてないぞ……」

「えつ!~そ、 そう?」

「もうこの話はおしまい!~昼休みも終わるしな!~
と言つて澪児は走つていつてしまつた。

「逃げやがつた……」

亮平は呆れた顔で見送つた。

「おこ加奈子。やっぱりお前澪児の事が好き」

「うわあああーだまれ亮平！死ねー！」

「コラ

亮平のみぞおちにボディブローをおみまいし加奈子も逃げていった。

今日最後の授業も終わり下校時間になった。

「加奈子～。亮平知らないか？ 曜休みからみかけないんだが……」

「え、さあ？ シラナイワヨ？」

あきらかに態度がおかしかったがついにむと怒り飛ばしだったのでやめておく。

「そ、それより澪児。今日用事ある？ なになら遊びに行ひよー。」「うーん…。今日はやめとくよ。かよつとよつたといこうがあるか

」「うーん…。わかったわ。じゃあまた明日ねー。」「

加奈子はそう言って教室からでていった。

「マンガ読みたいから帰りたい、なんて言えなによなー」

澪児はひとつ玄き教室をでた。

澪児は学校の近くにある商店街に向かっていた。マンガの新刊を買ったのだ。

（やっぱり加奈子には悪いことしちゃったかなー…。今度埋め合わせするかー）

そんな事を考えながら歩いていると、

(ん?)

ある異変に気付いた。

(人がいない?)

今は夕暮れだ。ここは商店街なのでいつもなら夕食の買い物に来る主婦たちであふれる。しかし今は一人も見掛けられない。商店の蛍光灯の光だけが妖しく輝いていた

「ミツケタ…」

不意に声が響いた。

「“ドウチョウウシャ”…。コロス!」

澪児の後ろに……鬼がいた。しかも目を爛々と光らせ追いかけて来る。

「うわあああ！」

(はつ！？あまりに衝撃的で今日の出来事が走馬灯のように……)

「おい大丈夫か？」

そういうて美少女は話しかけてきた。腰まで届く黒い髪、黒く澄んだ瞳、モデルのようなスレンダーな体型。道端ですれちがつたら百人中百人が振り替えるだろう。

しかし一つ変な所があつた。美少女は巫女服を着ていたのだ。神社ならともかくこんな町中では絶対に見掛けないだろう。
(近くに神社あつたかな？)

「おいつ！大丈夫か！？」
「だ、大丈夫です！」
「ならいい」

「グウウウ……」

吹き飛ばされた鬼が立ち上がつた。邪魔された事に腹が立つたのか美少女のことを睨みつけている。

しかし美少女は少しも怯むことなく平然と鬼を見ていた。

「お主はさがつておれ」
澪児はおとなしく指示に従つた。

「鬼ごときが我に逆らおうとはな……。来い雑魚！」
「グオオオ！」

鬼は美少女に向かつて真つ直ぐ突進していった。しかし美少女は避けようともせずただ右手を前にかざしただけだつた。

鬼がぶつかる瞬間美少女の右手が輝いた。

「去れ。雑魚！」

パン！

右手に触れたとたん鬼は吹き飛び、空中で破裂してしまった。あたりに鬼の肉片が散らばり血の臭いがみちる。それに澪児は顔をしかめた。この惨状を生み出した張本人は特に気にしていないうだつた。

「怪我はないか？」

そう言いながら美少女が近付いてきた。

「一応大丈夫です。ずっと走っていて疲れましたが…」

「そうか。我が夫に怪我がなくてよかつたよ…」

「……はあ？」

（今なんて言つた！？お、夫って言つたよな。夫って……あれのこどだよな…。ふ、夫婦の…、いやまで今この人とは出会つたばかりなはずだし……）

「どうした夫よ？や、やつぱりどこか怪我してるのか！？」

心配そうに美少女が顔を近付けてきた。澪児は少し下がり、

「本当に大丈夫ですって。それよりも聞きたい事があるんですけど

…」

「なんでも聞くがよい。我が夫」

嬉しそうな顔でまたそんな事を言つた。

「その…。今、俺の事を…お、夫って言いましたよね。なんですか？」

「そのままの意味だと思うが？我とお主が夫婦だということだよ」

「だからなんで夫婦なんですか！？まだ会つたばかりだつていうのに…」

「我じや不満か？」

少し悲しそうな声だつたので澪児は慌てて、

「い、いや決して不満というわけではなくてむしろ嬉し……いやそりゃ…

「ふふふ、冗談だ。いきなり夫婦なんて言われば誰でも困惑うだわ」

（からかわれた…）

澪児は少し落ち込んだ。

「事情を説明しようと思うのだが…その前に場所を変えようそりゃって美少女は歩きだした。

（とつあえずついていくしかなさそうだ…）

澪児も歩きだそうとしたとき、急に美少女が振り返った。

「やついえばまだ我が夫の名前を聞いてなかつたな。名前はなんという？」

「澪児です。巽澪児。えへとあなたの名前は？」

「我的名は瀧。よひしづな澪児」

瀧の満面の笑みに澪児はみとれてしまつた。

瀧に案内されてきたところは澪児も良く知つてゐる場所だつた。

水治神社…このあたりで一番大きい神社で代々龍を奉つてきたりしない。ちなみに同級生の穂村加奈子はこの神主の娘だ。

（加奈子と友達なのかな？）

「どうした澪児？」

「なんでもないです」

「ならいいが…。よし、あそこの小屋ではなぞ」
そういうて本殿の側の小屋へ向かつた。

この小屋は物置として使われているのか色々と物が溢れていた。その中になんとか座るスペースを見つけ、向かい合い座つた。

「何から話さうか…。よし、まずはあの鬼について話さう」

鬼…

澪児はその言葉を聞いてあんな化け物に追われてよく無事だつたなあ、と改めて恐怖を感じた。

「鬼は妖怪の一種だな。どんなものかは…追われていたからよくわかつてているだろ?」

澪児は頷きつつ、

「妖怪つことは他にもあんなのがいっぱいいるんですか?」

「たくさんいるわ。あ、ちなみに鬼は下級妖怪でまだ弱い部類に入る」

「あんな化け物でも下級なんですか…。といつかあんなのが暴れてもるつていうのになんて騒ぎにならないんですか?」

「全ての妖怪が悪事を働く訳ではない。それに無差別に人を襲うつて訳でもない。それと襲うときは結界をはるからな」

「そうなんですか…。無差別じゃないってことは俺はなんで襲われたんです?」

「うむ。まず悪事を働く妖怪はすべてある組織に属している。そしてある目的のために行動してゐるのさ」

「目的…」

「人間を滅ぼし妖怪が世界の頂点に立つこと…。それが奴ら”深淵の闇”の目的」

「人間を滅ぼす!大変じゃないですか!?」

「落ち着け澪児」

「す、すみません…」

「つむ。それで話の続きだが、闇があれば光もある。深淵の闇から人間を守るために戦う者たちもいるんだよ。それが通称”共存派”」瀧はそういうて微笑む。澪児は取り乱してしまった自分を少し恥じた。

「もしかして瀧さんはその共存派の？」

「そうだ。昔からずっとこの地を守ってきた」

澪児は疑問を感じた。瀧はどうみても自分と同じぐらいの年にしかみえない。それなのに昔からとうのはおかしい。

「昔から、というのはおかしい……と顔に書いてあるぞ」「そういうて瀧は笑う。

「実はな澪児。我是人間ではない。龍なんだよ」

「は？ 龍って……あの龍？」

「信じられないか？ 濑児」

「半信半疑つてところです……。瀧さんはそんな華奢な体でいとも簡単に鬼を倒しましたし……」

「半分も信じてくれれば今は充分ぞ。……それでお前が狙われた理由だが」

ガラガラ

話している途中に急に扉が開いた。

「やつと見つけた……帰ってきたなら一言知らせてよ

そこにたつていたのは穂村加奈子だった。

第三話・日常の裏側（後書き）

なんだか今回は会話ばかりになってしましました。やつぱり書くのは難しいです…

第四話・特別な力、1（前書き）

まずは皆さんにお読みしたいと思います。本当にじめんなさい。前話投稿から大分間がありました。今は大分忙しい時期で、中々考える暇がありませんでした。次からはできるだけ早く書こうと思います。面白いかどうかは分かりませんが、少しでも多くの人に読んで貰えれば幸いです。

「おお加奈子か。すまん、いやつに事情を説明していたのだよ」
そういうつて瀧は澪児を指さした。澪児と加奈子の目があつた瞬間、
加奈子の顔が悲しそうに歪んだ。

「もしかして澪児が同調者…なの？」

瀧はさも意外だという顔をして、

「知り合いだつたのか？世の中狭いな…」

と、一人でうんうんと頷いていた。

「いかにも澪児が我の同調者だよ」

それにもまた加奈子は悲しそうな顔をする。澪児にはなぜ加奈子がそんな顔をするのかわからなかつた。瀧はその顔には気付かなかつた。
「私、お茶いれてくるね」

そういうつて扉を開けてでていつてしまつた。

「じゃあ話の続きをするぞ？」

澪児は後で加奈子と話そつと心に決め、瀧の話を聞き始めた。

「さつき加奈子も言つていたが、澪児…。お前は同調者だ。だから鬼に狙われた」

「そういうえば鬼もそんなこと言つてました。それで同調者つてなんなんですか？」

「うむ。同調者とは…我等龍族と契りを交わす事で、両者の力を飛躍的に高めることができる者のことだ」

それを聞いて澪児は驚いた。ずっと自分は平凡な人間だと思つていたのだ。急に特別な力があると言わても嬉しさより先にただ驚くだけだつた。

「何を呆けておる？驚くのはまだまだこれからだぞ」
少し楽しそうに笑いながら瀧は言つた。

「具体的にどんな力が得られるか説明するぞ？まずは一つ目、運動能力が格段にあがる。そうだな……、ブ・ツプと戦つても開始

「3秒でＫＯ勝ちできるくらいには強くなるや」

「ブ・ツブ……」

龍神のくせになんでこんなことを知っているのか気になつたが、澪児は華麗にスルーすることにした。

「むう……、今のは笑うといふだぞ?」

スルー。

「……あけぼのほうが良かつたか?」

華麗にスルー。

「ゴホン!つまり、普通の人間にはまず負けないということだよ……」少し傷付いたのか声のトーンが落ちていた。少しやりすぎたかもしれないと思つた澪児は次のボケにはツッ「ミミます!」と、心中で謝つた。

ガラガラ

「少し休憩したら?」

加奈子がおぼんを持つて部屋に入つてきた。お茶の香りが2人の鼻孔をくすぐる。この香りは紅茶だろうか。

「そうするか……。加奈子の煎れる紅茶は最高だからな~」

澪児は鬼に追い掛けられてから何も飲んでいなかつたことを思い出した。

「そりなんですか? 楽しみだな」

intercept(前書き)

また更新が遅れてしましました…
急いで考えたので今回は短めです。『みんなさいみ（ーー）み

闇

この場所を表すのにふさわしい言葉が他に見つからない。見渡しても光という物が一切見当たらないのだ。常人ならばまず目が見えなくなつたと勘違いしてしまうかもしない。

「まだ誰も来てないのか？」

不意に声が響いた。姿は見えないが、声からすると若い男だということがわかる。

「儂以外は皆活動中じゃよ。」殺戮の風』

また声が響く。やはり姿は見えない。しわがれた女性の声だ。老婆だろうか。

「お前だけか？」狂える技巧』

『闇の濶』の4人のうち2人も集まつておるのだ。これでも集まつたほうじやないかえ？」

「まあ…な」

「それで？集めた理由はなんなのじや？」

「ああ。」極東の姫の同調者が現れた

男が言つた瞬間、場の空気が重いものに変わつた。

「それはまことかえ？」

「ああ。間者から報告があつた」

「まづいの…。今でさえ戦況は膠着しとるといつのに…」

老婆は深刻そうに考え始めた。「まだ契約はしてないがな

「それを早く言わぬか！」

それを聞き考えがつかんだのか嬉しそうに言つた。

「ならば儂の”玩具”を送ろうかの」

「ああ。俺もそう考えていた。同調者とはいえ契約前はただの人間だからな」

「やうじややうじや。儂にまかせい。では早速、そいつて闇から一つの気配が消えた。

「……”玩具”ね。気に入らん」

そういうて男も消えた。

異様な空間だった。真っ先に田につくのはずらりと並んだ硝子で出来た2メートル程の筒だ。その数は十や二十ではきかない。しかし目を引くのはそれだけではなかつた。老若男女、様々な人が筒の中に浮いているのだ。どこかホルマリン漬けの標本を彷彿とさせる。

「いつ見ても壯觀よのぉ……」

男に”狂える技巧”と呼ばれていた老婆だ。いつのまに現れたのだろうか。

「やはり儂の最高傑作の出番かの」

そう言って一つの筒の前に立つた。中には若い女が入つていて。髪は肩に届くくらいのショートカット。整つた顔立ちで美人の部類に入るだらう。

「田覚めよー桜華」

言葉と同時に、筒の中の女の目が開いた。

「おはよー。桜華」

老婆の声が響く。すると筒に徐々にひびがはいりはじめ、割れた。女が地面に着地する。と、同時に女が老婆に掴みかかった。

「私を旦那めさせたといつ」とは…。また私に罪を重ねるとこいつの
か！？」

苦しむそぶりもみせず老婆は言つ。

「忘れたわけじゃあるまいな？」

その言葉を聞いて老婆を掴む手から力が抜けた。

「ちょうど百人目だものなあ」

愉快そうに老婆は言つ。

「今回の標的は日本に居る。同調者が契約を済ませる前に殺れ」
女は悲しそうに顔を歪め、闇の中へと消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4992a/>

龍姫

2010年12月14日21時33分発行